

シリーズ 私の一冊の本

薬学部 吉成 浩一 先生

西内 啓 著

『統計学が最強の学問である[実践編]』

閲覧室 2 階 350.1/N 86-2 ダイヤモンド社出版

薬学部生をはじめ、生命科学・医療系の学生や、実験研究者が最も嫌いな科目の1つは「統計学」ではないでしょうか（ご担当の先生方、すみません）。一方で、多くの学生・実験研究者は、実験研究を進めるうちに、統計（学）が避けて通れない道であることを知ることになります。また、10年くらい前から「ビッグデータ」や「データサイエンス」が自然科学や社会科学の中で注目され、日常生活でもこれらの言葉を目にする機会が多いと思います。薬学分野でいうと、医薬品の開発やがんの診断・治療にビッグデータが大きな成果を挙げつつあります。統計学は、ビッグデータから価値のある情報を見つけ出すための重要なツールの1つです。

本書は、「統計学が最強の学問である」の続編として執筆されました。非常にキャッチーなタイトルで、タイトルだけ見ると「統計学がいかにかっこいいか」が永遠と書かれているのではないかと想像するかもしれませんが、前書は、統計学の「入門の入門書」として統計学とは何なのかを専門外の方でも分かりやすく解説し、続編である本書は、もう少し具体的に実例を挙げて解説しています。

例えば、「平均」、「割合」、「誤差」など、科学の分野だけでなく日常生活でも使うありふれた統計学用語の解説からはじまり、より専門的な「検定」や「回帰分析」についても触れられています。「3人の営業マンの訪問回数と契約数」、「体育系出身者かどうかでみるボーナス支給額の比較」、「Aさんは、BさんとCさんどちらと似ているか」などの表現から分かるように、専門的になりすぎず、読み物として読めるように書かれています。

本書で著者も書かれていますし、私自身もそうですが、理系の専門書を読んでいて、数式が出てくると読む手が止まる、という経験をした方も多いと思います。本書は約450ページからなり、数学的補足に約80ページが当てられています。それらは巻末にまとめられ、読む手が止まらないように工夫されています。

また、専門書のイメージを持たれるかもしれませんが、著者の経験や社会との関連（ビジネスでどのように役立っているかなど）の記述に多くのページが割かれ、自然科学・社会科学の垣根なく楽しめる本だと思います。そのため、本書を読んでも「統計」ができるようになるわけではありませんのでご注意ください！

著者が言う「統計学のスタートラインに立つための本」として、あるいは大学生・社会人の教養書として読んでみてはいかがでしょうか。